

丁ノ坪遺跡発掘調査報告書

— 万田四日市線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1) —

2011

大分県教育庁埋蔵文化財センター

丁ノ坪遺跡発掘調査報告書

— 万田四日市線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1) —



丁ノ坪遺跡全景（北から）

序 文

本書は、大分県教育委員会が県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて実施した、万田四日市線道路改良工事に伴う丁ノ坪遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する中津市は、大分県の北西部、福岡県との県境に位置しており、史跡福沢諭吉旧居や名勝耶馬溪などをはじめとする数多くの文化遺産が知られています。

調査を行った丁ノ坪遺跡は、古代の官道「勅使街道」の想定ルート上に位置しています。今回の調査では、官道は確認できませんでしたが、同時代から近世初頭頃までの生活の跡を明らかにすることができました。古代の遺構からは、同時期の瓦が確認され、周辺の伊藤田窯跡群との関係が注目されます。また、中世末から近世初頭頃の中国産陶磁器や肥前系陶器などの資料も出土しており、これらは、当遺跡の周辺に数多く築かれた中世城館との関連が想定できます。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究資料として広く活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多大な御理解と御協力をいただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成23年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 山 口 博 文

例 言

- 1 本報告書は、大分県教育委員会が平成21年度に実施した、万田四日市線道路改良工事に伴う丁ノ坪遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて、大分県教育委員会が実施した。
- 3 遺物や記録類の整理作業は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（以下、センターという。）で実施した。
- 4 出土遺物及び関係資料は、センターで保管している。
- 5 本書で使用した地形図（1/25,000）は国土地理院作成のものを利用した。
- 6 本書の執筆・編集は、センター一般事業班 友岡信彦が担当した。
- 7 本書の作成にあたり、中津市教育委員会 浦井直幸氏に助言を得た。

目 次

序 文
例 言

第1章 はじめに

| | |
|-------------------|---|
| 第1節 調査に至る経過 | 1 |
| 第2節 調査組織の構成 | 1 |

第2章 遺跡の立地と環境

| | |
|-----------------|---|
| 第1節 地理的環境 | 2 |
| 第2節 歴史的環境 | 2 |

第3章 調査の成果

| | |
|-----------------|---|
| 第1節 遺跡の概要 | 4 |
| 第2節 調査の概要 | 7 |

| | |
|---------------|----|
| 第4章 まとめ | 16 |
|---------------|----|

挿 図 目 次

| | | |
|------|-----------------|----|
| 第1図 | 丁ノ坪遺跡周辺の遺跡分布図 | 3 |
| 第2図 | 丁ノ坪遺跡調査区位置図 | 4 |
| 第3図 | 丁ノ坪遺跡遺構配置図及び土層図 | 5 |
| 第4図 | 遺構詳細配置図 | 6 |
| 第5図 | 土坑1～6実測図 | 8 |
| 第6図 | 土坑7～11実測図 | 9 |
| 第7図 | 溝状遺構1～3実測図 | 11 |
| 第8図 | 溝状遺構4～8実測図 | 12 |
| 第9図 | 柱穴群実測図 | 13 |
| 第10図 | 柱穴1実測図及び出土遺物実測図 | 14 |
| 第11図 | 調査区出土遺物実測図 | 15 |

表 目 次

| | | |
|----|------------|----|
| 表1 | 遺物観察表（土器類） | 16 |
| 表2 | 遺物観察表（土製品） | 16 |
| 表3 | 遺物観察表（瓦類） | 16 |
| 表4 | 遺物観察表（石器） | 16 |

写 真 図 版 目 次

| | |
|-----|-------------------|
| 図版1 | 丁ノ坪遺跡周辺景観 |
| 図版2 | 土坑2全景 土坑4・5全景 |
| 図版3 | 土坑7全景 溝状遺構1全景 |
| 図版4 | 溝状遺構2全景 溝状遺構3全景 |
| 図版5 | 柱穴群検出状況 柱穴1遺物出土状況 |
| 図版6 | 調査区全景 |
| 図版7 | 柱穴1出土遺物 調査区出土遺物 |
| 図版8 | 調査区出土遺物 |

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

調査の起因

調査の起因となった万田四日市線道路改良工事は、中津市大字福島と伊藤田間1,680mのバイパス整備事業である。この事業は、当路線の幅員狭小区間の整備及び沿線の小中学校の通学路となる歩道の整備により安全な通行確保を目的としている。

調査の経過

今回、調査の対象となった万田四日市線の計画路線上には、福島遺跡・三保遺跡や古代官道の想定ルートが位置するため、調査方法など取扱いに注意を払った。

平成19年9月に土木建築部中津土木事務所から調査依頼を受け、その後、平成20年2月に最初の確認調査を実施した。対象地は三保遺跡の範囲内であった。

調査は対象地3,500㎡に幅1.5m、長さ10～50mのトレンチ4本を設定し、遺構の有無を確認した。確認調査の結果、当範囲は水田の造成が行われ、旧地形が大きく改変されており、遺構は検出されなかった。

2度目の調査依頼は、平成20年10月に受け、確認調査を平成21年2月に実施した。今回の対象地は周知遺跡の範囲内ではなかったが、古代官道の一部がルート上に位置していた。

調査は対象地9,000㎡に幅1.5m、長さ10～30mのトレンチ9本を設定し、遺構の有無を確認した。この結果、約1,700㎡の範囲で柱穴・土坑等を確認したため、本調査が必要となった。

また、この遺跡は新発見の遺跡として所在地の字名から『^{ちよんのつぼ}丁ノ坪遺跡』とし、大分県遺跡台帳に登録を行った。本調査は、平成21年12月1日～平成22年1月29日の間実施した。調査面積は1,700㎡であった。

整理作業は、平成22年4月～6月に実施し、平成22年度に報告書を刊行した。

第2節 調査組織の構成

調査時の調査体制については下記のとおりである。

平成21年度

| | | |
|------------|-----------|---------------|
| 佐藤英一 | 埋蔵文化財センター | 所長 |
| 坂本嘉弘 | 埋蔵文化財センター | 次長 |
| 宮永敬三 | 埋蔵文化財センター | 管理予算班主幹（総括） |
| 小林昭彦 | 埋蔵文化財センター | 一般事業班課長補佐（総括） |
| 友岡信彦（調査担当） | 埋蔵文化財センター | 一般事業班主幹 |

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

中津市は大分県の最北部に位置する。西は福岡県と県境をなし、北は周防灘に面している。市内は英彦山に源流を發する山国川が南から北方向へ流れ、海岸部から沖代平野にかけての流域一帯の生活を潤している。

今回調査を行った丁ノ坪遺跡は旧中津市（平成17年3月に中津市と下毛郡3町1村の市町村合併）のほぼ中央付近に位置する。この旧中津市は山国川右岸の沖積平野と、この平野の東に展開する低平な洪積台地（大貞台地）、また南は八面山から派生する樹枝状の低丘陵（通称 下毛原丘陵）から形成されている。

丁ノ坪遺跡は中津市の南東部を北東へ流れる犬丸川左岸の洪積台地上に位置する。

第2節 歴史的環境

丁ノ坪遺跡の周辺には、福島遺跡や三保遺跡、畑中遺跡など縄文～弥生時代の遺跡とともに、田丸城跡や町居屋敷遺跡など中世の城跡や多くの遺跡が存在する。また小字に「屋敷田」や「居屋敷」、「殿山」、「殿ノ前」などの地名がみられる。

丁ノ坪遺跡周辺の縄文時代の遺跡は、入垣貝塚や長久寺貝塚、ボウガキ遺跡などがある。この時代の遺跡は、ほとんどが標高10m前後の洪積台地縁辺部周辺や山国川自然堤防上に位置している。ボウガキ遺跡（注1）は3基の竪穴住居跡や土坑墓とともに、貝塚を伴う集落である。また、この遺跡で注目されるのは住居跡内に埋葬された4体の縄文人骨である。

弥生時代になると遺跡は市域全域に展開するようになる。台地の縁辺部では上ノ原遺跡や福島遺跡、三保遺跡などが確認されている。特に福島遺跡（注2）で確認された墳墓のほとんどが二列埋葬の形態をとり、さらには多量の土器を伴う祭祀土坑の存在などの埋葬形態の在り方は注目すべきものであり、宇佐市の野口遺跡や御幡遺跡の在り方と共通するものがある。

丁ノ坪遺跡周辺の古墳時代遺跡では、生産遺跡や集落遺跡、墳墓群など人間の生活を構成する遺跡が確認されている。生産遺跡においては伊藤田窯跡群があげられる。この窯跡群は古墳時代から歴史時代の多くの窯跡が分布し、東九州有数の古代窯業地の一つとして知られている。集落遺跡としては、前田遺跡や犬丸川流域遺跡群（第2・4地点）などが確認されている。墳墓群では城山古墳群や黒川古墳、岩井崎横穴墓群など古墳や横穴墓群が確認されている。

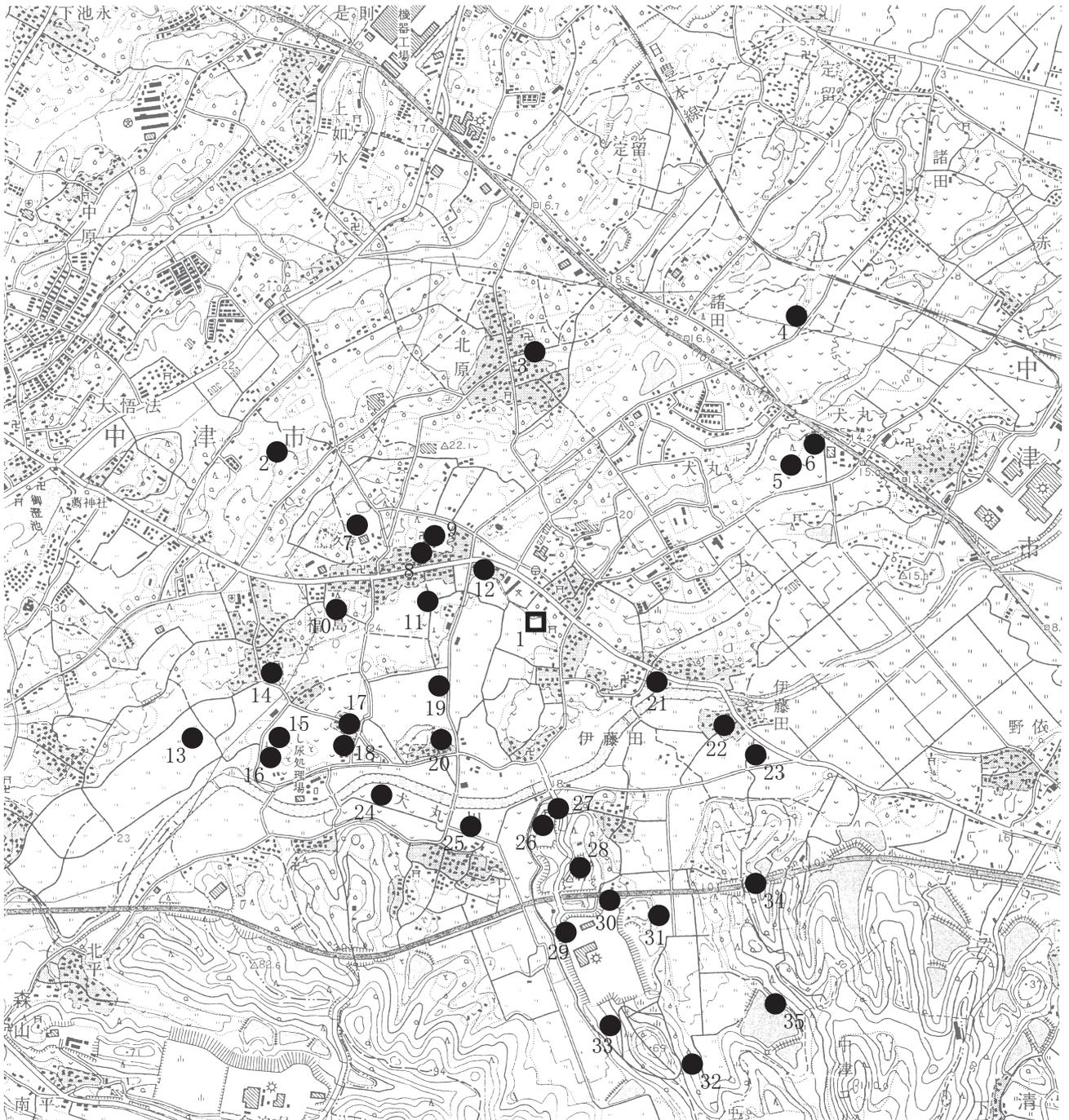
古代には台地中央を東西に貫く官道「勅使街道」が整備されている。この官道は万田四日市線の道路改良計画路線と一部重なり、丁ノ坪遺跡においては官道想定地となっている。官道沿いには相原廃寺、下毛郡衙（長者屋敷遺跡）、薦神社などが配置されている。生産遺跡は伊藤田窯跡群が古代から脈々と生産を続けている。集落遺跡としては諸田南遺跡が確認されている。

中世になると田丸遺跡（長久寺城跡）をはじめ、中世城館が各地に築かれるようになる。特に丁ノ坪遺跡周辺は前述した長久寺城跡や福島城跡、上伊藤田城跡、下伊藤田城跡、山中城跡、町居屋敷遺跡、仮屋敷遺跡など多くの城館が存在する地域である。また、16世紀末には黒田氏入封により中津城が築かれる。

近世になると「中津藩」となり、黒田氏に替わり細川氏が入封してくる。細川氏により城・城下町の整備がさらに行われ、その後小笠原氏が入封し、城下町の完成をみる。小笠原氏の後、奥平氏が中津藩を統治し、明治4年の廃藩置県を迎える。

注1 『ボウガキ遺跡』（中津市文化財調査報告書）三保の文化財を守る会・中津市教育委員会、1992年1月

注2 『犬丸川流域遺跡群』（中津市文化財調査報告書第19集）中津市教育委員会、1997年3月



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|------------|-----------|
| 1 丁ノ坪遺跡 | 2 土木貝塚 | 3 北原遺跡 | 4 諸田南遺跡 | 5 上畑成遺跡 |
| 6 田代遺跡 | 7 田丸城跡 | 8 長久寺貝塚 | 9 町居屋敷遺跡 | 10 福島遺跡 |
| 11 三保遺跡 | 12 畑中遺跡 | 13 加来東遺跡 | 14 山中城跡 | 15 ボウガキ遺跡 |
| 16 入垣貝塚 | 17 仮屋敷遺跡 | 18 福島地下式横穴 | 19 中原遺跡 | 20 下伊藤田城跡 |
| 21 黒川古墳 | 22 伊藤田田中遺跡 | 23 屋敷田遺跡 | 24 犬丸川流域遺跡 | 25 前田遺跡 |
| 26 上伊藤田城跡 | 27 城山横穴墓群 | 28 城山古墳群 | 29 城山窯跡 | 30 草場窯跡 |
| 31 穂屋1号窯跡 | 32 穂屋2号窯跡 | 33 大谷窯跡 | 34 夜鳴池窯跡 | 35 ホヤ池窯跡 |

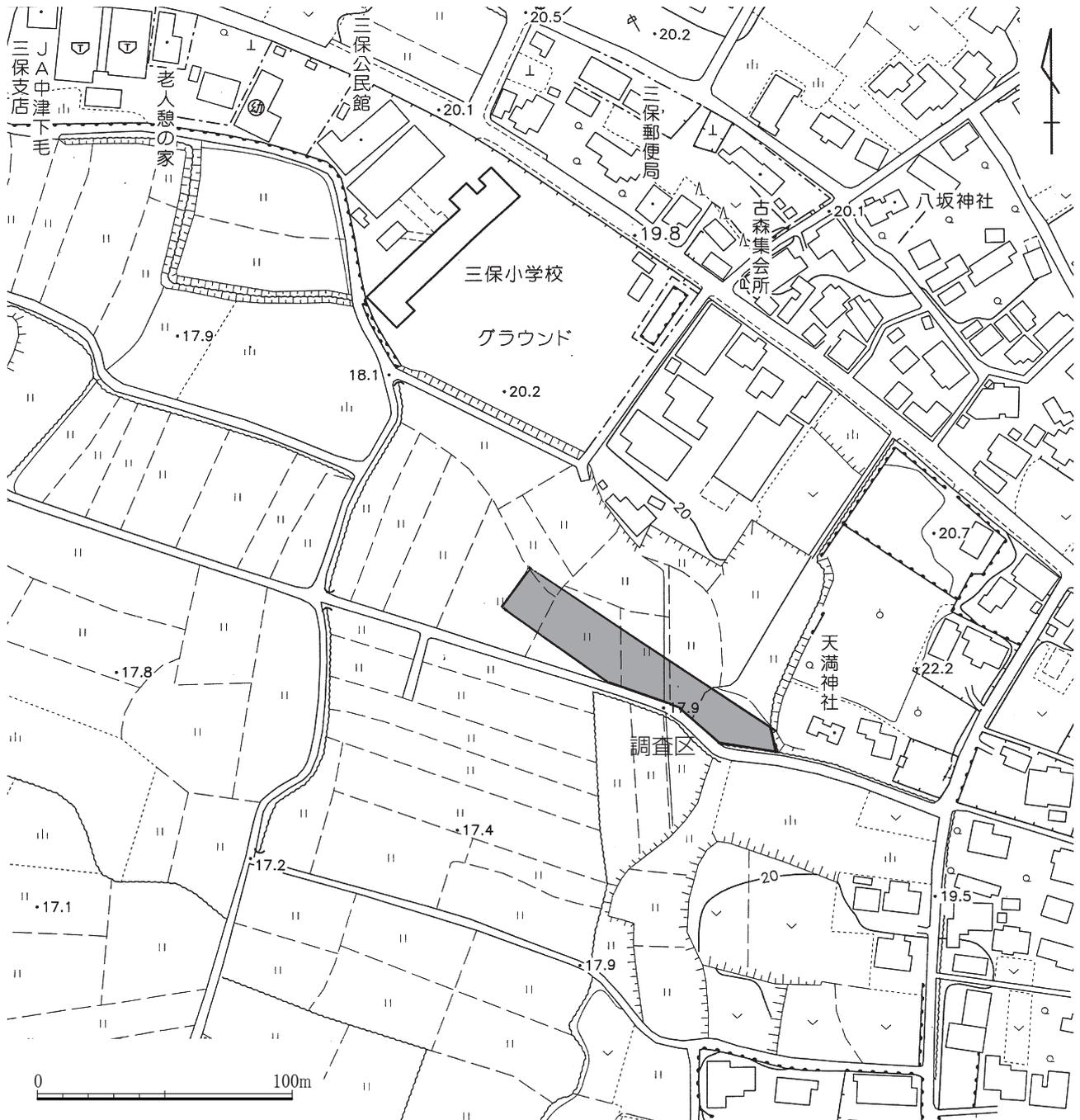
第1図 丁ノ坪遺跡周辺の遺跡分布図

第3章 調査の成果

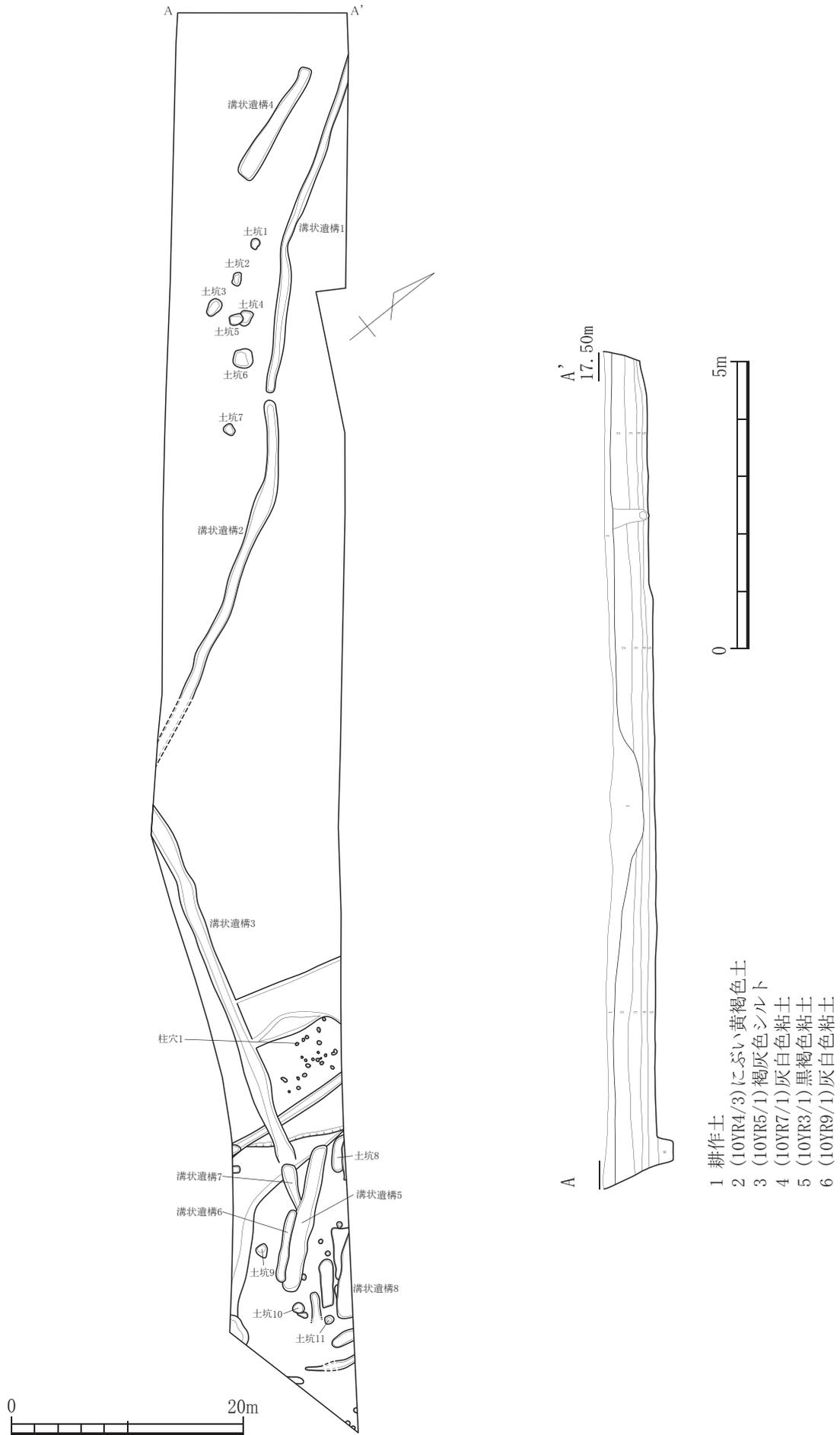
第1節 遺跡の概要

丁ノ坪遺跡は、中津市大字伊藤田字丁ノ坪に所在する。周囲を三保遺跡や福島遺跡など、多くの遺跡に囲まれた地域であり、古代官道のルート上に位置している。現況は比較的平坦な水田地帯であり、三保遺跡などの立地する地形より低地に位置し、比高差は3m前後である。

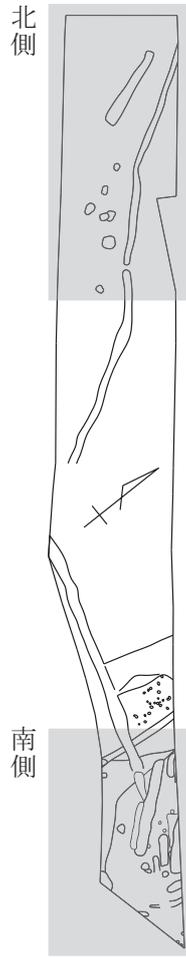
調査では、土坑や溝状遺構、柱穴群などが確認されたが、官道に関連すると考えられる遺構の検出はなかった。遺構の分布は調査区の西と東端に集中していた。中央部分は溝状遺構の一部が確認されたが全体に地形が低く、水田造成時に旧地形を大きく改変され、遺構は削平をうけた可能性が高い。出土遺物は、遺構に伴うものは少なく、ほとんどが遺構検出時出土の遺物である。



第2図 丁ノ坪遺跡調査区位置図 (1/2,500) (中津市基本図20を使用)

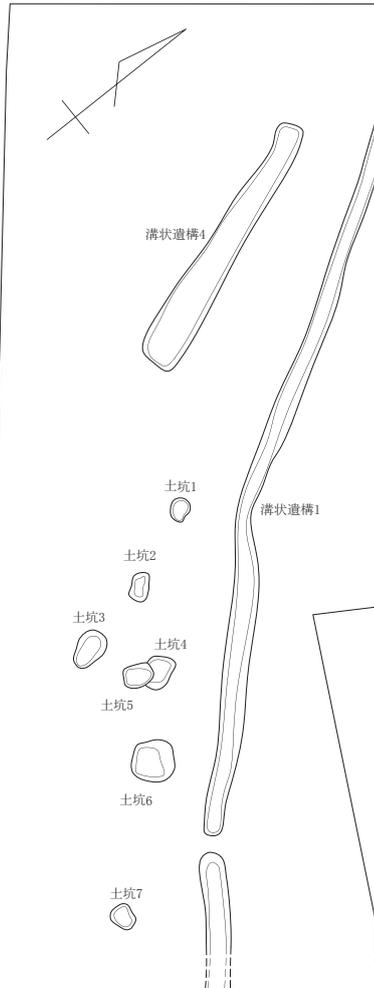


第3図 丁ノ坪遺跡遺構配置図及び土層図 (1/500・1/100)

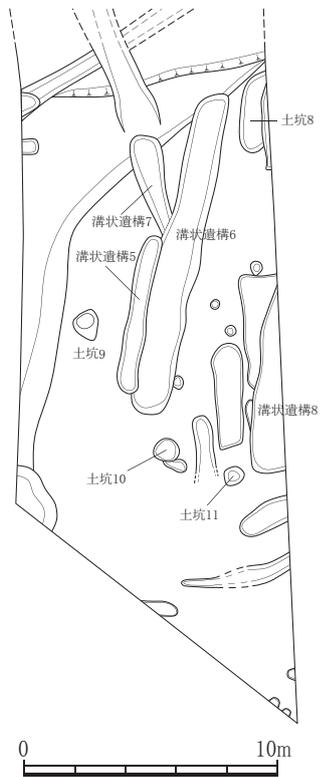


遺跡全体図 (1/1,000)

北側



南側



第4図 遺構詳細配置図 (1/300)

第2節 調査の概要

調査区は東西に長いので、2回に分けて調査を行った。調査面積は約1,700㎡である。土坑は西側の1群と、東側の1群に大別できる。また、東側では柱穴群が一定範囲内で集中して確認された。中央部分の遺構の分布は希薄で、10cm前後の黒褐色粘質土が堆積していた。

土坑1 (第5図)

土坑1～7は調査区の西側で検出された遺構である。

土坑1は調査区の北西側に位置する。長径0.96m、短径0.54m、深度0.1m前後の浅い不整形の土坑である。埋土は黄褐色シルト層で、遺物は出土していない。

土坑2 (第5図)

土坑2は土坑1の南1.5mに位置する。長径1.2m、短径0.7m、深度0.15m前後の不整形の土坑である。床面は凹凸がみられ、埋土は灰黄褐色シルト層である。遺物は出土していない。

土坑3 (第5図)

土坑3は土坑2の南1.0mに位置する。長径1.62m、短径1.0m、深度0.2m前後の楕円形の土坑である。床面は凹凸がみられ、埋土は灰黄褐色シルト層である。遺物は出土していない。

土坑4 (第5図)

土坑4は土坑3の東1.0mに位置する。西側を土坑5に切られている。長径1.42m、短径1.06m、深度0.3m前後のほぼ方形の土坑である。床面はレンズ状を呈している。埋土は3層に分層できる。遺物は出土していない。

土坑5 (第5図)

土坑5は土坑4を切り込んで構築されている。長径1.2m、短径0.7m、深度0.12m前後の不整形の土坑である。床面は凹凸がみられ、埋土は灰黄褐色シルト層である。遺物は出土していない。

土坑6 (第5図)

土坑6は土坑4・5の南東2.0mに位置する。長径1.72m、短径1.68m、最深で0.38m前後の方形土坑である。床面は凹凸がみられ、埋土は2層に分層できる。遺物は出土していない。

土坑7 (第6図)

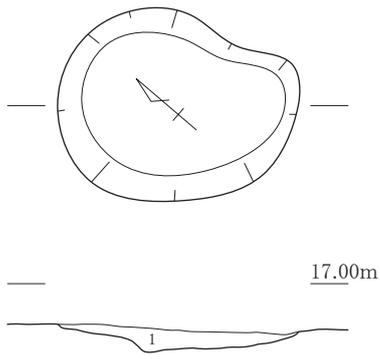
土坑7は土坑6の南東3.0mに位置する。長径1.04m、短径0.89m、深度0.15m前後の不整形の土坑である。床面は凹凸がみられ、埋土は黒褐色シルト層である。遺物は出土していない。

土坑8 (第6図)

土坑8～11は調査区の東側で検出された遺構である。

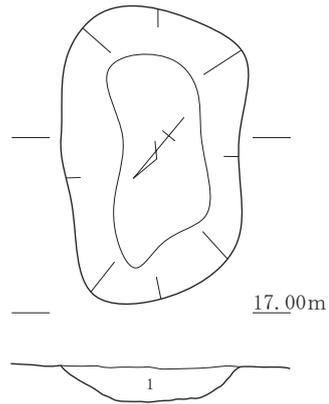
土坑8は調査区の東側に位置する。北西部分は調査区外へと延びる。また、北側部分は切り込まれている。東西の長径3.34m、南北径は残存で0.88m、深度0.05m前後の浅い方形の土坑である。埋土は暗褐色シルト層で砂礫を含んでいる。遺物は出土していない。

土坑 1



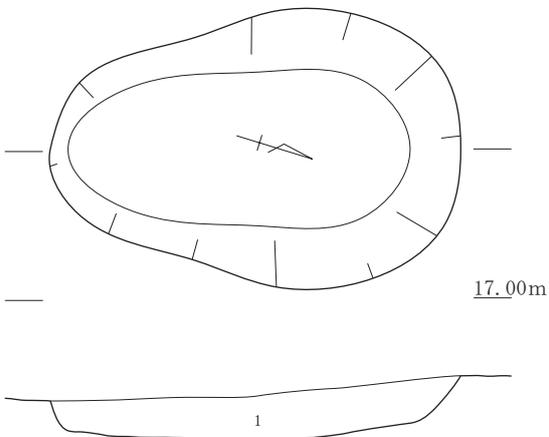
1 灰黄褐色シルト(10YR4/2)

土坑 2



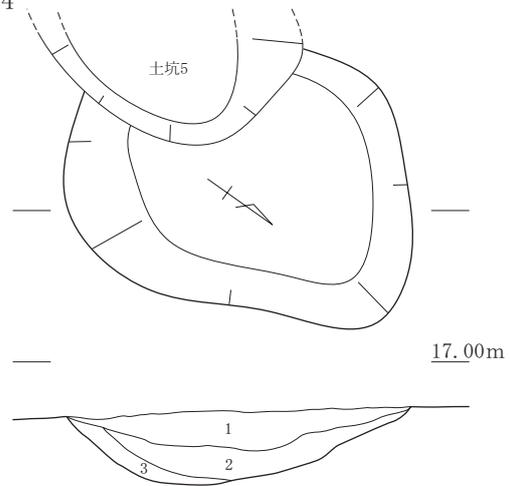
1 灰黄褐色シルト(10YR4/2)

土坑 3



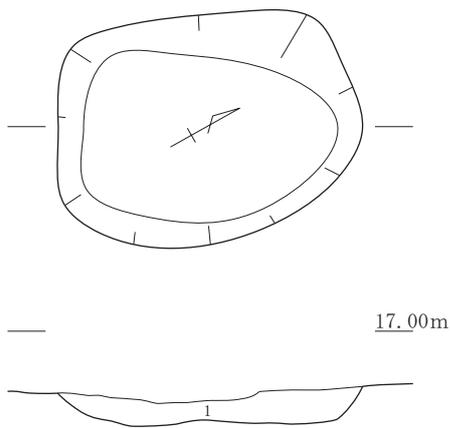
1 灰黄褐色シルト(10YR4/2)

土坑 4



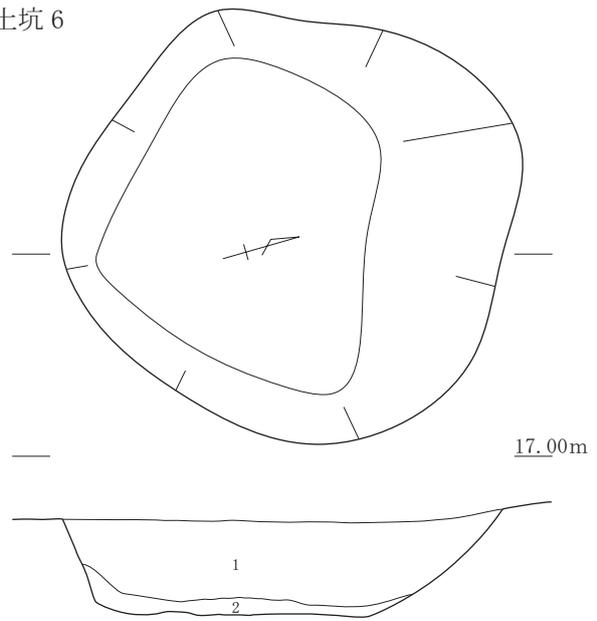
1 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
 2 褐灰色シルト(10YR4/1)
 3 灰色砂質土(N4/)

土坑 5

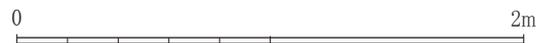


1 灰黄褐色シルト(10YR4/2)

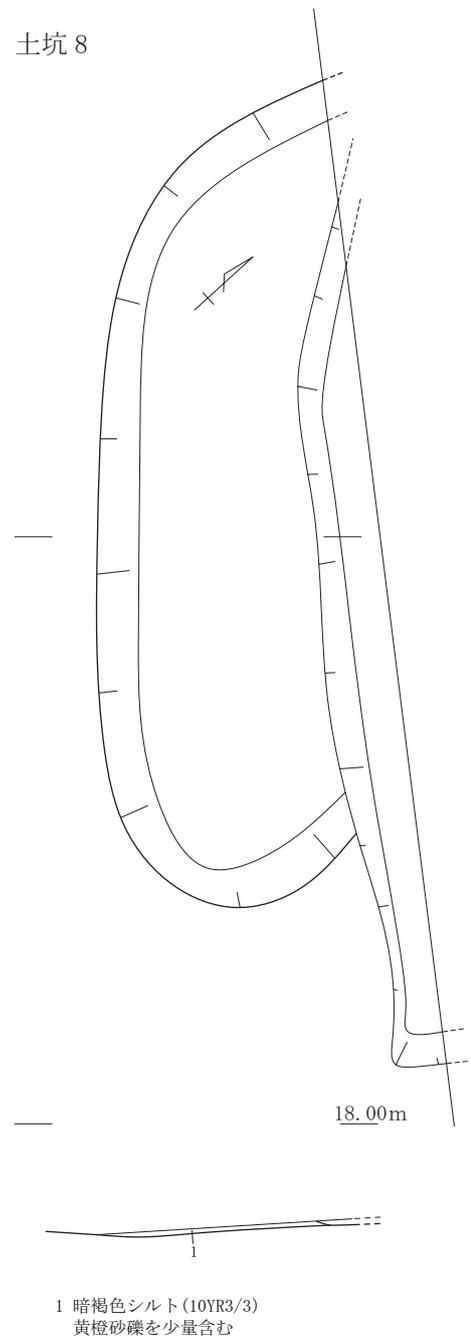
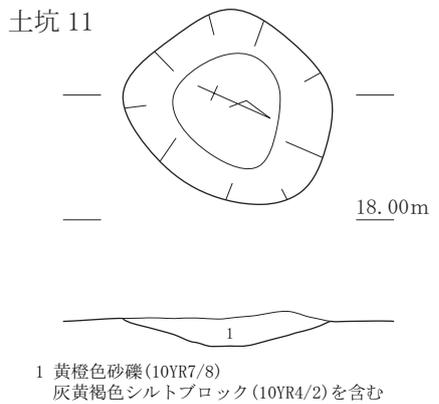
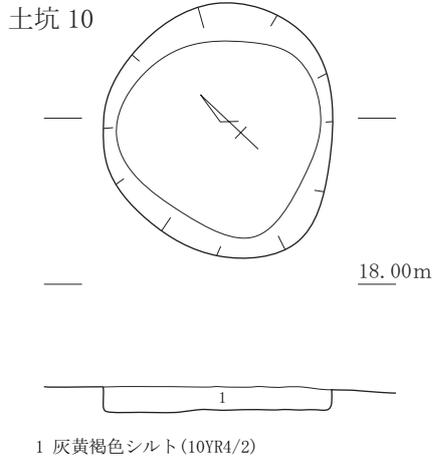
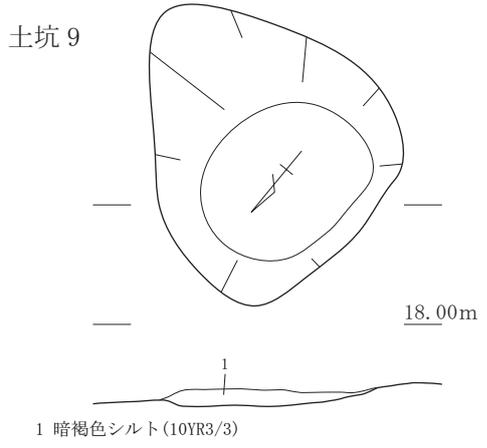
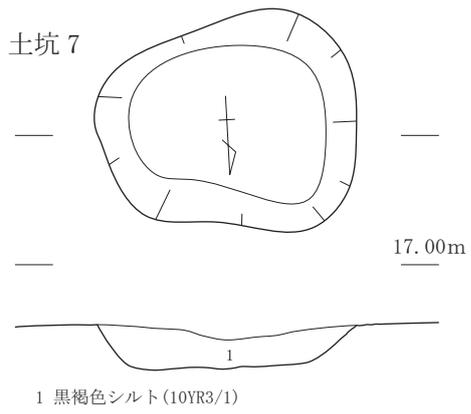
土坑 6



1 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
 2 にぶい黄橙色粘土(10YR7/2)



第5図 土坑1~6実測図 (1/30)



第6図 土坑7~11実測図 (1/30)

土坑9（第6図）

土坑9は土坑8の南9.0mに位置する。長径1.16m、短径1.0m、深度0.08m前後の不整形の土坑である。床面は凹凸がみられ、埋土は暗褐色シルト層である。遺物は出土していない。

土坑10（第6図）

土坑10は土坑9の東3.0mに位置する。長径1.0m、短径0.92m、深度0.1m前後のほぼ円形の土坑である。床面は平坦で、埋土は灰黄褐色シルト層である。遺物は出土していない。

土坑11（第6図）

土坑11は土坑10の東2.0mに位置する。長径0.82m、短径0.74m、深度0.1m前後のほぼ円形の土坑である。床面はレンズ状で、埋土は黄褐色砂礫層内に灰黄褐色シルトブロックを含んでいる。遺物は出土していない。

溝状遺構1（第7図）

溝状遺構1は調査区の北西～南東方向で確認された。残存長は31.4m、幅0.8～1.1m、深度0.2m前後であり、北西端は調査区外へと延びる。中央付近で僅かに東方向へ屈曲している。埋土は2層に分層される。遺構に伴う遺物は出土していない。

溝状遺構2（第7図）

溝状遺構2は溝状遺構1の南東部先端から0.5m付近で始まり、さらに南東へ延びる遺構である。溝状遺構1と同一遺構と考えられる。残存長は27.8m、幅1.1～1.8m、深度0.3m前後であり、南東端は調査区外へと延びる。断面は逆台形を呈していて、埋土は3層に分層される。遺構に伴う遺物は出土していない。

溝状遺構3（第7図）

溝状遺構3は調査区の西側で確認された遺構で、東～西へと続く。西側は調査区外へと延びる。東端は削平されていて、消滅している。残存長は32.2m、幅0.4～2.0m、深度0.2m前後である。埋土は黒褐色シルト層の単層である。遺構に伴う遺物は出土していない。

溝状遺構4（第8図）

溝状遺構4は調査区の北西で確認された。長さ10.9m、幅1.0～1.8m、深度0.1m前後である。埋土は褐灰色シルト層の単層である。遺構に伴う遺物は出土していない。

溝状遺構5（第8図）

溝状遺構5は調査区の西側で確認された遺構である。溝状遺構6を切って構築している。長さ6.4m、幅0.7m、深度0.1m前後である。埋土は黄褐色砂礫層の単層である。遺構に伴う遺物は出土していない。

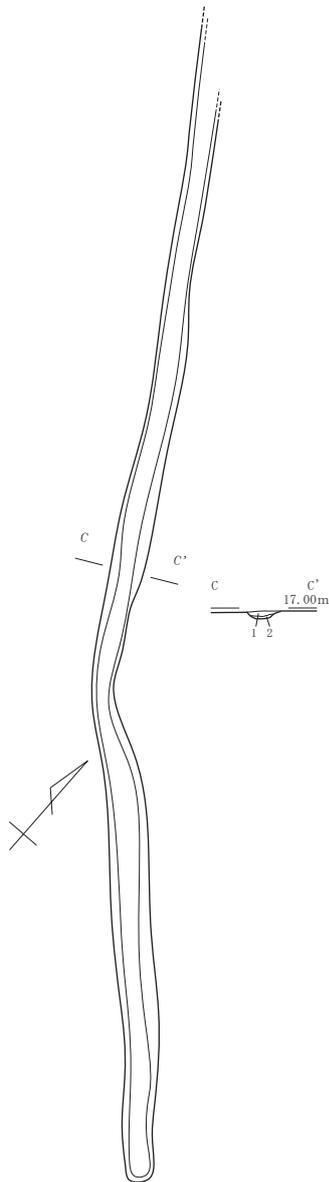
溝状遺構6（第8図）

溝状遺構6は調査区の西側で確認された遺構である。溝状遺構5に切られている。長さ13.1m、幅1.3～1.6m、深度0.1m前後である。床面はほぼ平坦である。埋土は黄褐色砂礫層の単層である。遺構に伴う遺物は出土していない。

溝状遺構7（第8図）

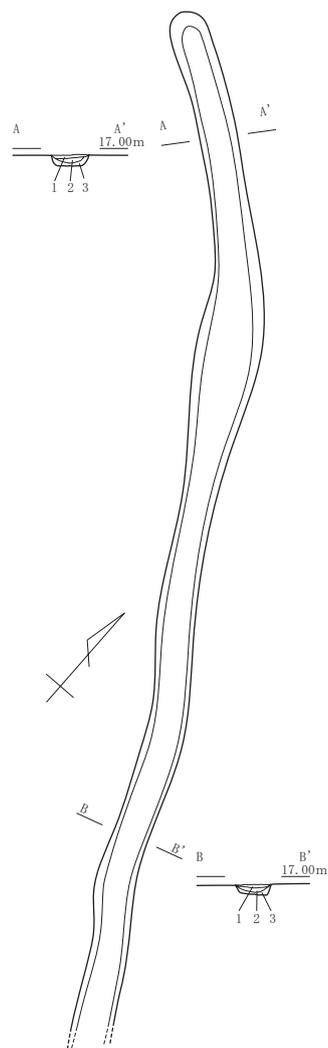
溝状遺構7は溝状遺構3の東側先端から0.3mで確認された遺構である。溝状遺構6に切られている。残存長4.0m、幅1.3m、深度0.15m前後である。埋土は暗褐色シルト層の単層である。遺構に伴う遺物は出土していない。

溝状遺構1



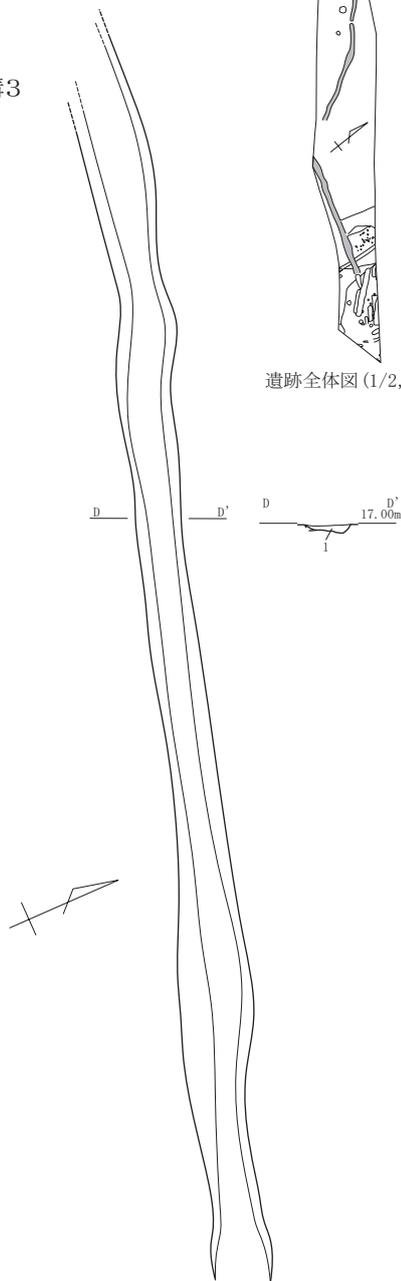
- 1 灰黄褐色シルト (10YR4/2)
- 白色砂粒 灰白色シルトブロックを含む
- 2 褐色シルト 灰白色シルトブロックを含む
- 3 暗褐色シルト (10YR3/3)

溝状遺構2

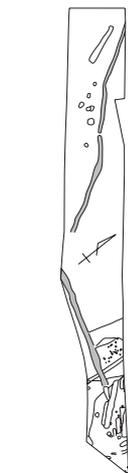


- 1 灰黄褐色シルト (10YR4/2) 灰白色シルトブロックを含む
- 2 褐色シルト 灰白色シルトブロックを含む
- 3 暗褐色シルト (10YR3/3)

溝状遺構3



- 1 黒褐色シルト (10YR3/2)

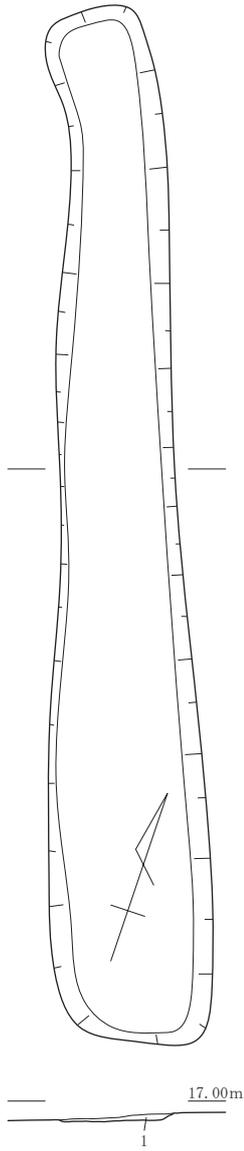


遺跡全体図 (1/2,000)



第7図 溝状遺構1~3実測図 (1/200)

溝状遺構 4

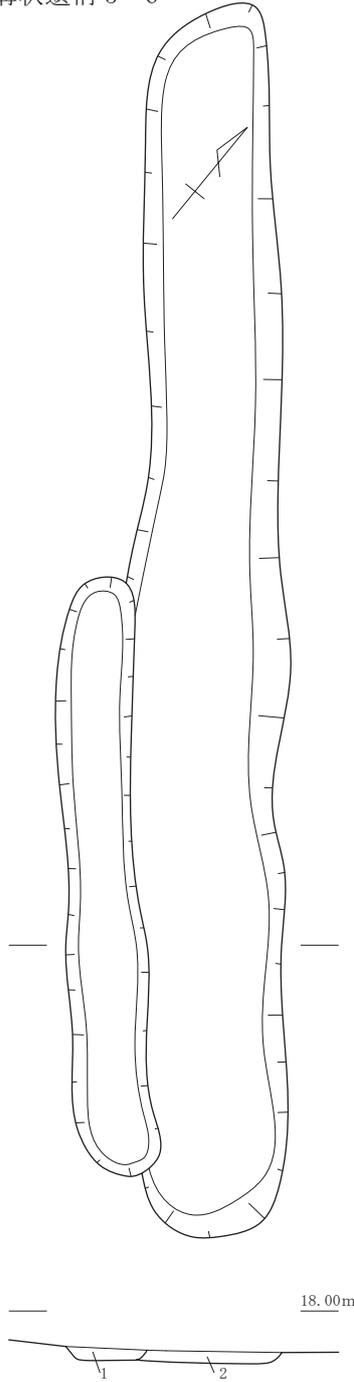


1 褐灰色シルト(10YR5/1)



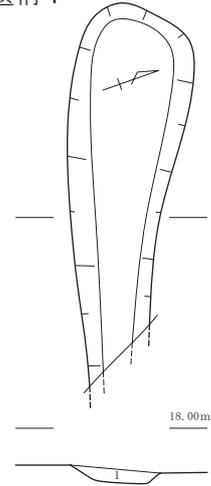
遺跡全体図(1/2,000)

溝状遺構 5・6



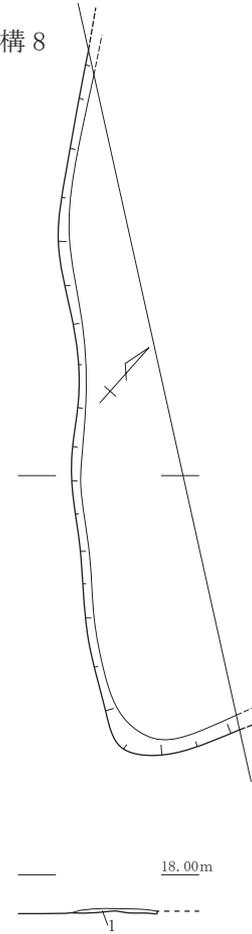
1 黄橙色砂礫(10YR7/8)
 灰黄褐色シルトブロック(10YR4/2)を含む
 2 黄橙色砂礫(10YR7/8)

溝状遺構 7



1 暗褐色シルト(10YR3/3)
黄橙色砂礫を少量含む

溝状遺構 8



1 灰黄褐色シルト(10YR4/2)



第8図 溝状遺構4~8実測図(1/80)



第9図 柱穴群実測図 (1/60)

溝状遺構8 (第8図)

溝状遺構8は調査区の北東端に位置する。北側は調査区外となる。溝状遺構5の北0.5mで確認された遺構である。残存長7.6m、残存幅1.4m、深度0.1m前後で、埋土は灰黄褐色シルト層である。遺構に伴う遺物は出土していない。

柱穴群 (第9図)

柱穴は調査区の東側で確認されている。特に中央付近では、1段高い範囲に多く確認された。この範囲は東西5m、南北7m程の広さで平坦である。当初は当地域には掘立柱建物跡等の建造物が建っていたものが、水田などの造成により削平されたと思われる。柱穴は20数個確認したが、遺物の出土は柱穴1だけである。

柱穴1 (第10図)

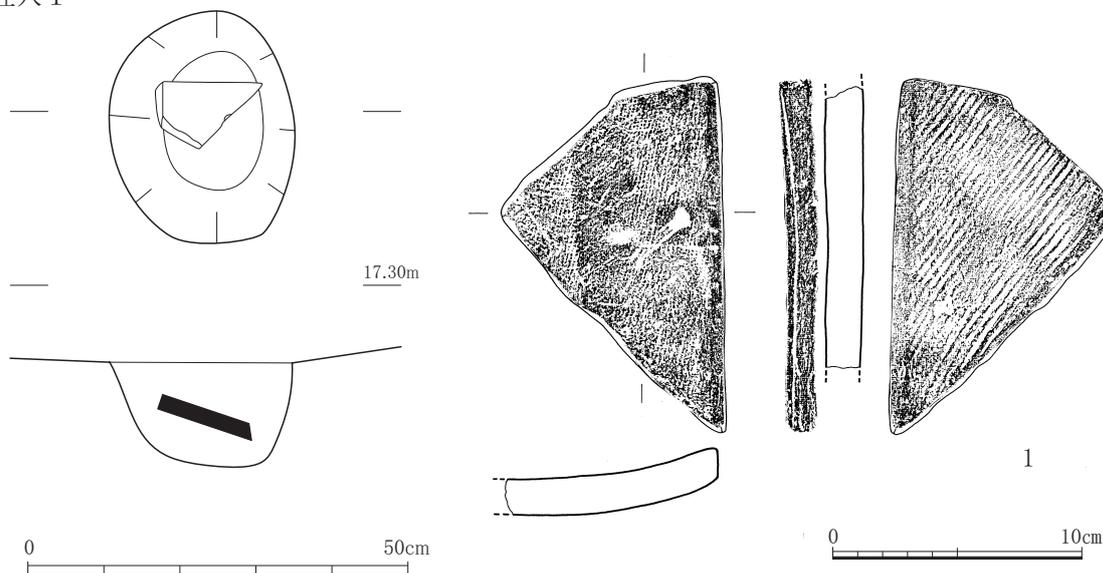
柱穴1は柱穴群の中の1基で、径0.24m、深度0.15mである。埋土中から平瓦の破片が出土した。凹面には糸切り痕、布目がみられる。また、模骨痕が顕著である。凸面には平行タキ痕が残る。色調は燈色である。

調査区出土遺物 (第11図)

当調査区からの遺物の出土は少なく、図示できる遺物は20点前後である。遺物の時代は縄文～近世初頭まで幅広く出土している。いずれも遺構確認作業中に出土した遺物である。

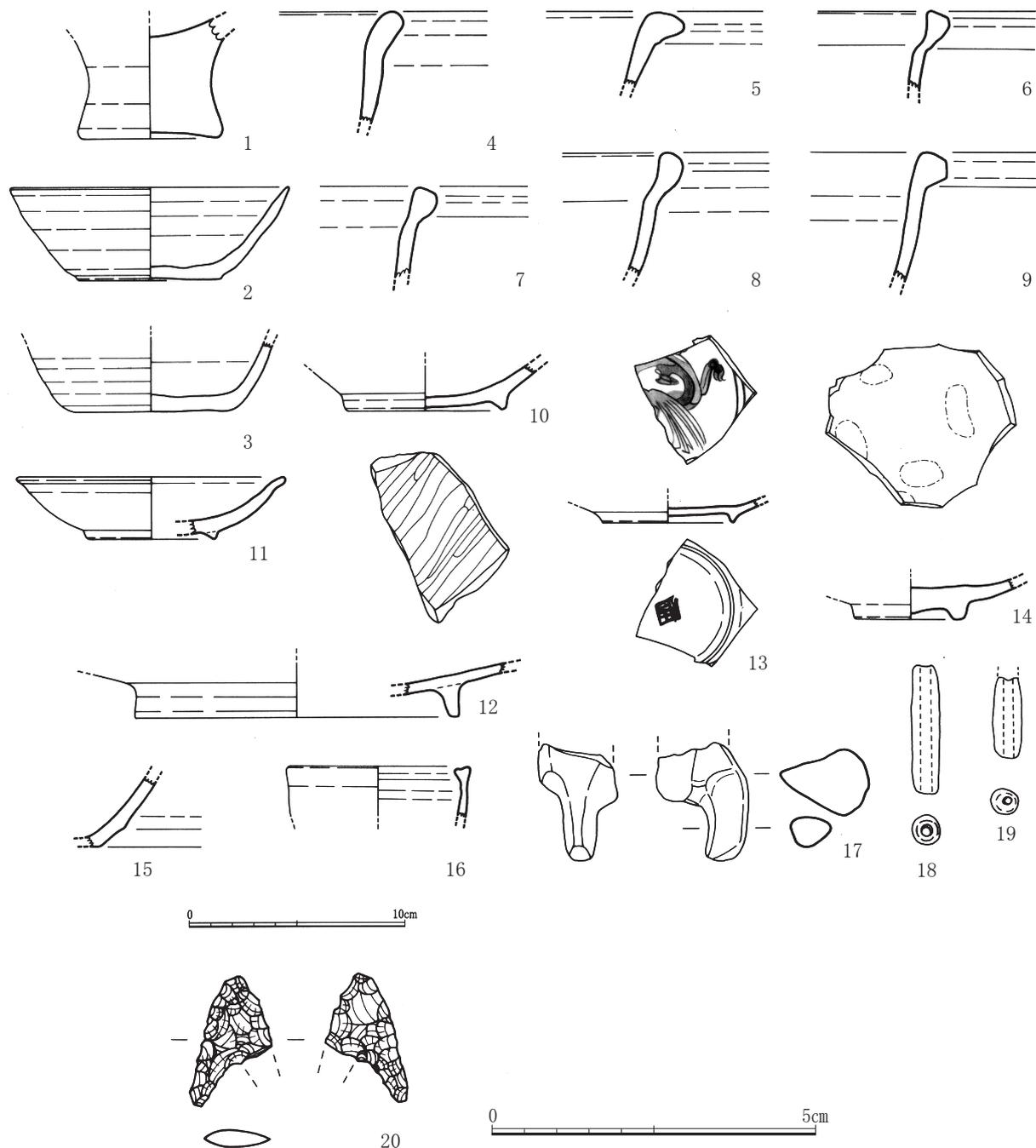
1は弥生土器で、甕の底部である。内外面とも摩滅が激しく焼成不明である。2・3は須恵器坏である。2は口縁から底部にかけての破片で、内外面ともナデ調整を施している。復元口径12.8cm、底径6.4cm、器高4.3cmである。色調は灰白色を呈している。3は胴部から底部の破片で、内部及び胴部外面はナデ調整、底部外面はヘラケズリである。底径は7.1cmで、色調は暗灰白色を呈している。4～6は土師質土器の鍋類の口縁部破片である。4は内外面ともナデ調整を施し、色調は褐灰色である。5も内外面ともナデ調整を施し、色調は赤燈色である。6は口縁部内外面ともナデ調整で、胴部外面に横方向のケズリ痕がみられる。外面にはススが付着している。7～9は瓦質土器の鍋類の口縁部破片で、内外面ともナデ調整である。10は内黒土師器の埴底部破片である。高台は貼付で、底径7.1cmである。内外面ともナデ調整である。11は瓦器の皿である。高台は貼付で、内外面にミガキ調整の痕跡がみられる。豊前地方にはみられないタイプで、関西系の可能性を持つ。12も瓦器の皿で、高台貼付である。内面にはミガキ調整の痕跡が認められる。13は中国産景德鎮窯系の青花皿の底部で16世紀後半代の製品である。高

柱穴 1



第10図 柱穴1実測図及び出土遺物実測図 (1/10・1/3)

台に離れ砂が多量に付着している。見込みには龍文、高台内面には「福」銘の異体字がみられる。14は肥前（唐津）陶器皿の底部破片である。17世紀前半代の製品で、見込みに砂目が認められる。高台内面は露胎である。15は瀬戸美濃産の天目茶碗の胴部破片である。16は陶器の香炉の破片で、肥前陶器の可能性をもつ。復元口径は8.4cmである。17は石製品で、詳細は不明である。18・19は土錘である。18は完形で長さ5.9cm、最大幅1.3cmである。19は一部欠損している。20は石鏃で姫島産の黒曜石である。両面とも押圧剥離による調整が施されている。最大長2.0cm、残存幅1.0cm、最大厚0.25cm、重量0.4gである。



第11図 調査区出土遺物実測図 (1/3・1/1)

表1 遺物観察表（土器類）

| 図版番号 | 遺物番号 | 種類 | 器種 | 大きさ (cm) () は復元径 | | | 形態・整形・調整の特徴 | 胎土・焼成・色調 | 遺構名等 | 備考 |
|------|------|------|----|-------------------|-------|-----|--------------------------|--------------------------|------|---------------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | |
| 第11図 | 1 | 弥生土器 | 甕 | | 6.2 | | 調整不明 | 角閃石・白色砂粒多く含み、色調は赤褐色、焼成良好 | | |
| 第11図 | 2 | 須恵器 | 坏 | (12.8) | 6.4 | 4.3 | 内外面ともナデ調整 | 砂粒を少量含み、色調は灰白色、焼成良好 | | |
| 第11図 | 3 | 須恵器 | 坏 | | 7.1 | | 胴部内外面とナデ調整で、底部外面ヘラケズリ | 角閃石多く含み、色調は暗灰白色、焼成良好 | | |
| 第11図 | 4 | 土師器 | 鍋 | | | | 内外面ともナデ調整 | 角閃石少量・白色粒多く含み、色調は褐色、焼成良好 | | |
| 第11図 | 5 | 土師器 | 鍋 | | | | 内外面ともナデ調整 | 角閃石・白色粒少量含み、色調は赤褐色、焼成良好 | | |
| 第11図 | 6 | 土師器 | 鍋 | | | | 口縁部内外面ともナデ調整、胴部外面ヘラケズリ調整 | 角閃石多く含み、色調は黒灰色、焼成良好 | | |
| 第11図 | 7 | 瓦質土器 | 鍋 | | | | 内外面ともナデ調整 | 角閃石多く含み、色調は黒灰色、焼成良好 | | |
| 第11図 | 8 | 瓦質土器 | 鍋 | | | | 内外面ともナデ調整 | 角閃石・白色砂粒少量含み、色調は黒灰色、焼成良好 | | |
| 第11図 | 9 | 瓦質土器 | 鍋 | | | | 内外面ともナデ調整 | 角閃石・白色粒少量含み、色調は淡褐色、焼成良好 | | |
| 第11図 | 10 | 土師器 | 碗 | | 7.1 | | 内外面ともナデ調整、高台貼付 | 砂粒少量、色調は内面黒色・外面淡黄色、焼成良好 | | 内黒土師器 |
| 第11図 | 11 | 瓦器 | 皿 | (12.4) | (5.7) | 2.9 | 内外面ともミガキ調整、高台貼付 | 色調は黒灰色、焼成良好 | | |
| 第11図 | 12 | 瓦器 | 皿 | | | | 内面ミガキ調整、外面ナデ調整 | 角閃石・白色粒を少量含み、色調は黒灰色、焼成良好 | | |
| 第11図 | 13 | 磁器 | 皿 | | 6.0 | | 高台に離れ砂付着 | 精緻 | | 景徳鎮窯系 |
| 第11図 | 14 | 陶器 | 皿 | | 4.9 | | 高台内面露胎、見込みに砂目 | 精緻 | | 肥前唐津系 |
| 第11図 | 15 | 陶器 | 碗 | | | | 胴部の一部露胎 | 精緻 | | 瀬戸美濃産 天目茶碗 |
| 第11図 | 16 | 陶器 | 香炉 | (8.4) | | | 内外面とも施釉 | 精緻 | | |

表2 遺物観察表（土製品）

| 図版番号 | 遺物番号 | 種類 | 材質 | 大きさ (cm) | | | 遺構名等 | 備考 |
|------|------|----|----|----------|-----|-------|------|----|
| | | | | 長さ | 幅 | 重量(g) | | |
| 第11図 | 18 | 土錘 | | 5.9 | 1.3 | 12.3 | | |
| 第11図 | 19 | 土錘 | | | 1.3 | 7.3 | | |

表3 遺物観察表（瓦類）

| 図版番号 | 遺物番号 | 種類 | 材質 | 大きさ (cm) | | | 遺構名等 | 備考 |
|------|------|----|----|----------|---|-----|------|-------------------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| 第10図 | 1 | 平瓦 | | | | 1.4 | 柱穴1 | 凹面糸切り痕・布目 凸面平行タキ痕 |

表4 遺物観察表（石器）

| 図版番号 | 遺物番号 | 種類 | 材質 | 大きさ (cm) | | | 遺構名等 | 備考 |
|------|------|----|-----|----------|---|------|------|--------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| 第11図 | 17 | 脚? | | | 4 | | | |
| 第11図 | 20 | 石鏃 | 黒曜石 | 2.0 | | 0.25 | | 姫島産黒曜石 |

第4章 まとめ

丁ノ坪遺跡は、古代官道「勅使街道」のルート上に位置していることから、調査前から官道の一部、或いは関連施設の検出が期待されていた。

調査の結果、確認できた遺構は溝状遺構や土坑・柱穴などで、官道や関連施設の確認はできなかった。

古代頃の可能性を持つ遺構は、柱穴が集中して検出された地域であろう。この部分は、他地域より僅かながら標高が高く、遺構確認面の残りが良い。また、検出された柱穴群の1つから平瓦の破片が出土している。この平瓦は、当遺跡から南東に約600m離れた場所にある伊藤田窯跡群で生産された可能性を持つ。伊藤田窯跡群は大分県最大の古代窯跡群で、6世紀後半～8世紀前半代までの須恵器が連続的に生産されている窯跡群である。この窯跡群中のほぼ中央付近に、穂屋池と呼ばれる貯水池が造られており、この池の両岸にも複数の窯跡が確認されている。この窯跡の一部が瓦窯跡と想定されており、この窯で焼かれた瓦が、当時の官道沿いの丁ノ坪遺跡まで運ばれた可能性がある。

溝状遺構や土坑からは遺物の出土がなく、明確な時期は不明であるが、遺構検出等で出土した遺物は中世末～近世初頭の頃の遺物のため、これらの遺構の年代はおおよそ同時代頃と思われる。

今回調査を行った丁ノ坪遺跡は、周辺の三保遺跡や畑中遺跡などと比べると低地に位置しており、遺跡の立地としては良くない。さらに現状は水田として造成されており、旧地形が大きく改変されたものと思われる。

古代官道や関連遺構を含む当地域の詳細は、今後、周辺の微高地を含めた調査を待つて検討する必要がある。

写 真 图 版



丁ノ坪遺跡周辺景観（東から）



土坑2全景（東から）



土坑4・5全景（西から）



土坑7全景（北から）



溝状遺構1全景（北西から）



溝状遺構2全景（南から）



溝状遺構3全景3（西から）



柱穴群検出状況（南から）



柱穴1遺物出土状況（南から）



調査区全景（南東から）



調査区全景（北西から）



10图-1 表



10图-1 裏



11图-1



11图-5



11图-2



11图-3



11图-6



11图-7



11图-8



11图-9



11图-13 表



11图-13 裏



11图-14 表



11图-14



11图-18·19



11图-20

報告書抄録

| ふりがな | ちよんのつぼいせき | | | | | | | |
|--------------------|---|------|------------------|--|--------------------|-------------------------------|-------|------|
| 書名 | 丁ノ坪遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 万田四日市線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (1) | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第57集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 友岡信彦 | | | | | | | |
| 編集期間 | 大分県教育庁埋蔵文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒870-1113 大分市大字中判田1977 TEL 097-597-5675 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2011年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡 | | | | | |
| ちよんのつぼいせき 丁ノ坪遺跡 | なかつし 中津市 いとうだ 伊藤田 | 203 | 274 | 33° 33′ 45″ | 131° 14′ 19″ | 平成21年12月2日 ～ 平成22年1月20日 | 1700㎡ | 道路改良 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 丁ノ坪遺跡 | 集落遺構 | 古代 | 柱穴 土坑 溝状遺構 | ・古代 平瓦、須恵器 ・中世～近世 貿易陶磁器（青花） 肥前系陶器 瀬戸美濃産陶器 | | | | |
| 要約 | <p>丁ノ坪遺跡では溝状遺構や土坑、柱穴が検出された。このうち、古代の遺構と考えられるのは柱穴が集中して確認された地域である。</p> <p>溝状遺構や土坑からは遺物の出土がなく、明確な時期は不明であるが、遺構検出等で出土した遺物は中世末～近世初頭のため、これらの遺構の年代は同時代頃の可能性をもつ。</p> <p>今回の調査では古代の官道及び関連遺構の確認はできなかった。</p> | | | | | | | |

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第57集

丁ノ坪遺跡

万田四日市線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

平成23年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
TEL (097) 597-5675

印刷 有限会社 中央印刷
〒870-0021 大分市顕徳町2丁目2-38
TEL (097) 532-3805
